

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.31
SPRING 2013

源氏物語(当館蔵)

目次

●メッセージ

国文学研究資料館41年 今西祐一郎 1

●研究ノート

『和泉式部日記』の本文異同への新視点

—傍記混入から見えてくるもの— 伊藤 鉄也 2

合羽摺り絵本『彩色画選』とカラリスト松寿堂 鈴木 淳 4

「蔵書印データベース」にできること一つつながるデータ、可視化する書脈 青田 寿美 6

『中国古籍総目』の編纂について 呉 格 8

●トピックス

平成24年度 日本古典籍講習会 10

人間文化研究機構連携展示

「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」 太田 尚宏 11

国文学研究資料館常設展示「和書のさまざま」 12

百人一首たまたまばこ 寺島 恒世 12

平成25年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会通算第59回)の開催 13

新収資料紹介 谷川 恵一 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

国文学研究資料館 41 年

館長 今西 祐一郎

国文学研究資料館は、昨平成 24 年に創設 40 周年を迎え、本年からは 50 周年に向かっての新しいサイクルに入りました。

品川区戸越からの移転後 5 年を経た立川での事業・研究体制も安定し、創設以来継続してきた調査・収集事業、また立川の充実した設備を生かした展示、館外の研究者との共同研究プロジェクトの実施などを滞りなく実施・遂行しています。

新設備の機能を生かした展示は、源氏千年紀の特別展示、一昨年秋の陽明文庫の国宝を含む貴重書展示、昨年の方丈記 800 年記念展示など、いずれも好評を博してきましたが、本年度からはいささか方針を変え、本館所蔵の典籍を中心とした常設展示を軸に、来館者に本館の事業と研究の姿を示す展示に力を入れることになりました。

もちろん、従来行ってきた研究展示や人間文化研究機構の連携展示を止めるわけではありませんが、常設展示を柱とすることによって、従来、年数回の特別展示に伴う展示替えのための休室期間を大幅に減らし、展示室の有効活用と経費節減を兼ねた運営を目指します。

事業計画としては、一昨年、昨年と 2 年間にわたって運営費交付金特別経費の交付を受けて実施してきた館蔵資料ならびに収集マイクロフィルムのデータベース化が、本年からさらに本格的な展開を開始し

ます。

それは、日本学術会議の提言にもとづいて計画された「日本語の歴史的典籍のデータベース構築」プロジェクトで、20 の拠点大学との共同作業による『国書総目録』所載典籍の全冊画像データベースの作成です。

国文学研究資料館では、昨年、学術会議の提言に基づく計画を作成し、学術審議会のヒアリングを経て、25 年度から 10 年間にわたる大型プロジェクトとしての概算要求をおこないました。残念ながら、25 年度の「大規模学術フロンティア促進事業」の選には漏れましたが、幸いにも 26 年度に向けて再チャレンジへの準備経費が計上されました。

館ではそれを受けて、新組織「古典籍データベース研究事業センター」を立ち上げ、特任教授 1 名以下、特任准教授、ポスドク研究員等を任用、事務部門も新設して、事業を開始すると同時に、来年度「フロンティア促進事業」採択に向けての準備に専念します。

この事業は、館創設以来の調査・収集事業、古典籍総合目録データベース作成というこれまでの事業の総決算でもあり、50 周年に向けてその実現にたゆみない努力を続けていく所存です。

本年度も、利用者各位のご活用をお待ちしております。



戸越時代の当館



現在の当館

『和泉式部日記』の本文異同への新視点 —傍記混入から見えてくるもの—

伊藤 鉄也 (国文学研究資料館教授)

〈新視点の提示〉

平安時代の歌人である和泉式部の『和泉式部日記(和泉式部物語)』には、現在4種類の本文が伝わっている。三条西本・応永本・寛元本・混成本がそれである。

伝三条西実隆筆本(宮内庁書陵部蔵)に記された本文を精査し、諸本間の異同の実態と対比すると、三条西本は傍記が本行の当該語句の直前に混入することによって異文が発生していることが確認できた。これによって、本行の本文に傍記がなかった、一つ前の段階の本文の姿が推定できるようになる。さらには、異文の位相に関しても、今後の問題点が見えてくる。『和泉式部日記』の読みを新たに展開していく可能性が広がるのである。

三条西本は書陵部本だけが知られている。その最初の紹介者である池田亀鑑は、昭和2年までは自作説だった。しかし、昭和4年に『異本和泉式部日記』(現三条西本)を発見(『文学』岩波書店、昭和6年11月号で紹介、昭和8年8月と11月に翻刻紹介)すると、昭和9年以降は他作説に転じた。三条西本について鈴木知太郎は、「原典の形態を推究する上にも、欠くべからざる、第一義的な資料」(『和泉式部日記(解説・校異篇)』11頁、古典文庫・武蔵野書院、昭和33年)だとする。

混成本については、『群書類従』所収本を参照した。これは、応永本を基にして寛元本の本文を適宜取り込んで成立したものとされる。本書について吉田幸一は、「校訂は恣意的になされてあるし、本文は一層改悪されてある。」(『和泉式部日記』古典文庫、72頁、昭和39年)としている。ここでは、参考資料としてその翻字を適宜確認した。

現存三系統の本文から原本にたどり

着くことは不可能だとされている。そのため、三系統論から原本を追求することは、現在では断念されているといえよう。

しかし、傍記が本行に取り込まれるという、『源氏物語』と同じ書写実態が想定できるとすると、『和泉式部日記』における本文も再検討の必要がでてくる。今後は、收拾がつかないほどに混在している諸本間の本文異同に関して、傍記混入という視点から考えていくことが有効な研究手法の一つとなるだろう。

〈本文資料と研究経緯〉

『和泉式部日記』の本文異同に関しては、次の編著・論考が参考になる。

■「三系統本の相互倒置関係にある語句の処置」(『和泉式部研究一』吉田幸一、古典文庫、昭和39年)

■「『和泉式部日記』データベース化の問題点—現代版(異本・異文)の発生について—」(『人文科学データベース研究 創刊号』伊藤鉄也、同朋舎、昭和63年)

■『データベース・平安朝日記文学資料集 第一巻 和泉式部日記』(伊藤鉄也編、同朋舎、昭和63年)

■『四本対照 和泉式部日記 校異と語彙索引』(伊藤鉄也編、和泉書院、平成3年)

■「三条西本・寛元本・応永本における倒置によると考えられる異文についての検討」(『和泉式部日記本文の研究』大橋清秀、和泉書院、1991年)

また、傍記語句の本行混入の実態と本文異同の諸相については、『源氏物語』の異文研究の成果である以下の拙稿を参照されたい。

■「源氏物語古写本における傍記異文の本行本文化について—天理図書館蔵麦生本「若紫」の場合—」(『古代中世

文学研究論集 第三集』伊井春樹編、和泉書院、2001年、拙著『源氏物語本文の研究』おうふう、2002年所収)

■「若紫における異文の発生事情 —傍記が前後に混入する経緯について—」(『源氏物語の展望 第1輯』森一郎・岩佐美代子・坂本共展編、三弥井書店、2007年)

■「傍記混入の実態から見える源氏物語諸本の位相—「常夏」の場合—」(『物語の生成と受容5』文学形成研究系「平安文学における場面生成研究」プロジェクト編、国文学研究資料館、2010年)

〈『和泉式部日記』の傍記語句の混入〉

『和泉式部日記』において傍記だと思われる語句が、書かれた場所の前や後に混入する例を確認しておく。多様な本文異同の形態がある中で、比較的わかりやすい一例をあげよう。

次の例は、『四本対照 和泉式部日記 校異と語彙索引』の〈文節番号1497〉(44頁)の箇所である。

月の明るい夜、訪れた敦道親王が差し出す手紙を、和泉式部はお話をするにも離れていて具合が悪いので扇で受け取った、という、非常に優美な場面である。

[三] 女ものきこえんにもほとゝをくてひむなければあふきを

[寛] ものきこえんにもほとゝをくてひななければ女あふきを

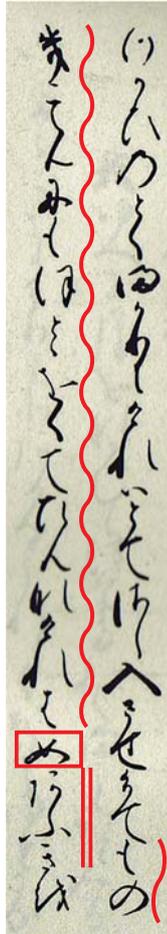
[応] 物きこえんにほとゝをくてひななければ女あふきを

[混] 物聞えんにほとゝをくてひななければ女あふきを

ここでの「女」という語句の本文異同は、前掲の吉田幸一と大橋清秀の論考には指摘がない。影印画像で、「女」



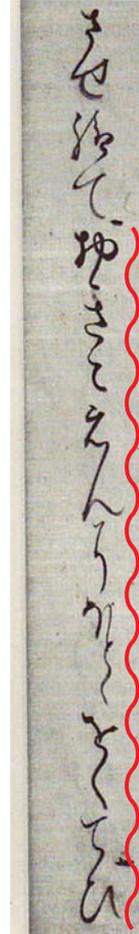
【三条西本（一七丁裏六行目）】



【寛元本（一八丁表七行目）】



【応永本（一九丁裏一行目）】



【応永本（一八丁表九行目）】

と「あふき」という語句の位置を確認されたい。

この例では、「もの（物）きこえん～」と「あふき」が書写されている2行分の行間に、「女」という字句が傍記されていたと思われる。そして、「あふき（扇）」の右横に傍記されていた「女」が、三条西本では前行の本行内に滑り込むように混入したであろうことが想定できる。「ものきこえんにもほとゝをくてひむなければ」という長い文が混入したとは考えられない例である。

ここで例示したものは、1行分のもの

長い文を間に挟んでの本文異同である。もっと簡単な、短い字句が傍記混入する例は枚挙に暇がないほどである。しかも、三条西本は、傍記が本行の当該本文の直前に混入する傾向が顕著なのである。

〈傍記混入のまとめ〉

『和泉式部日記』の三条西本における傍記前入の傾向は、『源氏物語』において〈甲類〉と私が分別する、河内本のグループ（群）に見られるものに近似している。三条西本の本文の一つの特徴だといよ。

傍記が本行に混入する実態の確認は、語句というピースでジグソーパズルを解くことに似ている。今後とも、『源氏物語』や『和泉式部日記』に限らず、他の古典文学作品にあっても、こうした傾向があることの確認を続けていきたい。

[付記] 本稿は、第15回国文研フォーラム（平成24年11月21日）で報告した内容をまとめたものである。

合羽摺り絵本『彩色画選』とカラリスト松寿堂

鈴木 淳（国文学研究資料館名誉教授）

町田市立国際版画美術館に所蔵される明和四年（1767）九月刊『彩色画選』三巻は、欧州など海外で高い評価を受けながら、日本ではあまり顧みられなかった江戸時代の絵本の代表的な例である。背景には、それが早く海外に所在を移し、国内で伝本稀少であるという事情が大きい。本絵本の所在について、筆者が確認しているのは、国内外併せて五本ほどであるが、三冊揃いは、フィラデルフィア美術館本と町田市美本だけである。とはいえ、それが卓越した技術を駆使し、美術的にも高い評価を受け、江戸時代の絵本の流れに深く関わるものであれば、研究の俎上に上せて、考察を試みる必要があるだろう。さいわい、町田市美本は、原箱とともに伝わった完好本である。

下絵を描いた画工は、大坂の浮世絵師北尾雪坑齋（名は辰宣）であり、本絵本の制作の功もつばら彼に帰せられて来た。雪坑齋は、文学的、教訓的な絵本、女性向けの往来物など、通俗的な板本の挿絵を数多く手懸けた大坂の浮世絵師として知られる。しかし、本絵本の作者として、雪坑齋の他に、合羽摺りの彫りと摺りを担当した松寿堂がいることを閑却視することはできない。名前が顕れているのは、いうまでもなく雪坑齋の方であるが、本絵本の出来映えを形作るものとしては、むしろ雪坑齋の序文に「松寿堂の主人紙形を彫、丹青を以て摺、一部の書をなせり、誠に艶にして運筆の勢あさやかなること、妙工と謂つへし」というごとく、カラリスト松寿堂の合羽摺りによるところの方が大きいと思われる。

松寿堂は、合羽摺り工としては他にまったくその名を聞かないものの、本絵本の刊記にその名を連ねる、書肆渋川（升屋）大蔵（安永九年没、三七歳。1744-1780）その人の堂号でもある。この本屋は、中村幸彦の「八文字屋本版木行方」にも論じられた通り、明和四年に当時、退

転期に当たっていた八文字屋の本を大量に求板し、売り出したところに特色がある。その伝記も、山本卓の論文「浮世草子末期における書肆升屋の動向（二）—書肆升屋伝攷併びにその作者の問題—」によって、菩提寺の源光寺の無縁仏の調査を通じて明らかにされたが、『彩色画選』を出した明和四年には、いまだ二十四歳の若き誇らかなアーティストであった。

本絵本の絵は、耕冊は福寿草図、六歌仙図、達磨図など、計二十一図。転冊は大黒図、撫子図、東山図など、計二十二図。収冊は福祿寿図、海老に炭と柑橘図、老梅図など、計十三図で、和漢、雅俗の領域に分け隔てなく及んでいる。耕冊と転冊は、ほとんどが半丁図であるが、収冊は最初の福祿寿図と最後の繭玉図が半丁図で、あとはすべて見開き図である。また、耕冊の首尾の福寿草と鷲図以外、耕、転冊とも必ずしも季節に沿って並んでいるわけではないのに対し、収冊は、ほぼ季節の順に並んでいるという違いがある。

色遣いは、限られた色数しか用いておらず、赤茶色、黄色、萌葱色、肌色、茶色、墨色、鼠色の七色であろうか。鮮明な原色系は用いずに、見た目にも柔らかな中間色系の色合いを使用しており、そのことが、全体の溫柔な印象を形作ることに与っている。また、墨色と鼠色（薄墨）しか用いていない絵が、計九図ほどあり、これらは、薄墨入りの墨摺り絵というべきものであるが、とりわけ山寺と十夜の山水画は、墨絵そのもののような淡泊な趣を湛えている。加えて、本絵本の絵は、線描による枠取りを極力省きながら、色を使った面だけによる描写いわゆる没骨法に努めたところに特色があり、いきおい絵柄は単純になり勝ちであるが、そのゆえにかえって力強さを感じさせるものがある。

日本では、漆山又四郎が本絵本に早く触れているが、その評価は至って冷淡

なものであった。欧米の文献で、もっとも早く言及したのは、ルイズ・ノートン・ブラウンの *Block Printing and Book Illustration in Japan* (1924) であり、ついで、フランスの Émile Javal 所蔵本の最初の売り立て目録 *Bibliothèque de Livres Japonais Illustrés: Appartenant A M. Émile Javel*（「ジャヴァル目録」1927）が、稀代の日本美術品のディーラーとして知られる林忠正本を紹介している。ついで、ジャック・ヒリアーの *Japanese Prints & Drawings from the Vever Collection* (1976)、同じく *The Art of Japanese Book* (Exceptional Techniques) (1987) といったところとなる。ヒリアーに代表される、海外の『彩色画選』に対する評価を見ると、その素朴な筆致が生み出す、洒脱ではんやりとした画趣とともに、とりわけ特異な技法である吹きほかし（吹き絵）と合羽摺りに注目が集まっていた。

またヒリアーは、少なくとも本絵本のいくつかは合羽摺りによる彫り、彩色だけによる技法によって制作されたことを見破っていた。そもそも板本の合羽摺りは、日本では延享三年（1746）『明朝紫硯』以来、本格的に発達した技法であるが、それ以前、俳諧春興帖などの配り本に胚胎していた技法であり、その中には、合羽摺りだけのカット風の挿絵もすでに行われていた。『彩色画選』も、はじめは『明朝紫硯』と同じ板摺りとの併用と見られていたが、最終的に、遂には主板による墨線をまったく用いずに没骨を駆使した、合羽摺りのみの彩色という、類を見ない技法であることが、浅野秀剛（『秘蔵浮世絵大観』ベレス・コレクション）解説などによって確信されるに至った。

さて、『彩色画選』の後継絵本と称される、岷江画『彩画職人部類』が明和七年（1770）に刊行されるが、この両者は、技法上、大きな相違がある。すなわち、『彩色画選』が合羽摺りだけの制作であった

のに対し、『彩画職人部類』は通常の板刻、板摺り（墨線）と合羽摺り（彩色）の合作であることである。後者は、下絵、合羽摺りを岷江が、彫りを岡本松魚という彫工が担当している。いわば、上方と江戸の名工による共同作業の成果であったが、主板の墨線の巧みさが強調されており、合羽摺りによる彩色の妙は半減されており、合羽摺りの試みも、江戸の見当を用いた色摺りの緻密な技法と絶大な人気の前に影が薄いという印象が抜きがたい。しかし、『彩画職人部類』は豪華本でありながら、伝本も数多く見受けられ、流布した痕跡が顕著である。

つまり、『彩画職人部類』は、かなり江戸の人々の人気を博したことは間違いないところである。とくに、色摺り絵本の全盛期の直前、天明四年（1784）に大田南畝

や朱楽菅江の序跋を添えて『彩画職人部類』が高津伊助によって再板されたことを軽く考えるべきではあるまい。たしかに合羽摺りという技法それ自体は、ほとんど江戸に根付かなかったかもしれない。しかし、江戸の板元、絵師、通人たちも、上方の合羽摺り絵が持つやまと絵風の上品で柔和な風趣にただならぬ魅力を感じ、それを江戸錦絵に取り込もうとしていたのではなからうか。一方、『彩色画選』も『彩画職人部類』と同様、上方ばかりでなく、江戸の本屋が流通に関わったにも関わらず、江戸で流布した痕跡がまったくといっていいほど確認できないのは、『彩色画選』にとっての不幸という外はない。死後、その怨念を晴らしてくれたのが、海外の評価であったことは、銘記してよいことであろう。

『彩色画選』の欧州個人蔵の一本に

は、上巻のみであるが、京都の俳諧師八百彦が依頼を受けて絵ごとに発句を書き添えている。識語を勘案すると、おそらく松寿堂がかねて面識のあった八百彦に着賛を要請したものと推測される。賛の発句は、絵とバランスよく認められており、本絵本が賛待ちの絵本として作られた可能性すら感じさせるものがある。ともあれ、この事実は、少なくとも『彩色画選』が俳諧の世界と親近な関係にあることを強く示唆するものである。松寿堂もかつては、岷江と同様、上方で俳諧摺物や春興帖などを手懸けていたカラリストであったのではなからうか。

なお、詳しくは、『浮世絵芸術』一六五号（2013年）の拙論「『彩色画選』と松寿堂」を参照いただきたい。



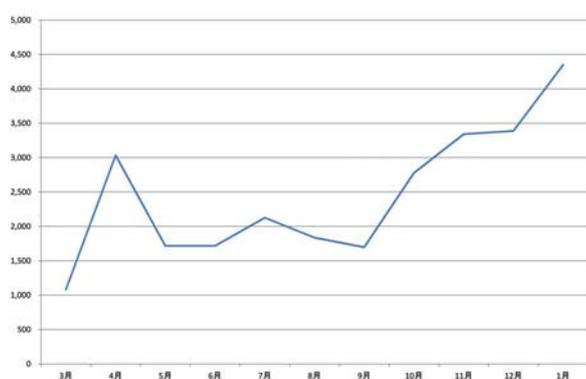
欧州個人蔵『彩色画選』耕冊、六歌仙図。八百彦の句は「花紅葉六人あたる炬燵かな」。

Ebi collection 立命館大学 ARC データベース, Ebi 1074.

「蔵書印データベース」にできること ——つながるデータ、可視化する書脈

青田 寿美 (国文学研究資料館准教授)

2012年3月29日に国文学研究資料館のWebサイト「電子資料館」の1コンテンツとして一般公開を開始した「蔵書印データベース」は、2013年3月末で公開から1年を迎える。アクセス数も順調に伸びており([図1]参照)、ユーザーからの一定評価も得つつある。



[図1] 2012年3月～2013年1月アクセス状況(検索のべ数)

初発は、当館の2つの共同研究「日本文学関連電子資料の構成・利用の研究」「近世風俗文化の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺(いずれも2008～2010年度)」に拠る研究成果の一部であったが、現在は、科学研究費補助金基盤研究(B)「多元知識の活用による日本文学情報ナビゲーションの研究」(研究代表者:古瀬蔵教授)に拠って、データの増強およびシステム改修を視野に入れた蔵書印データの有効活用と複合的情報の発信を企図した研究をおこなっている。

ある種、無秩序な集合体ともみえる蔵書印とその関連データから、いかにすれば、ユーザーの必要とする情報を迅速かつ効率的に検索・抽出させ得るか、さらにそれらを多角的に分析し法則性を導き出すためのメソッドとツールを提供できるのか。

本稿では、書誌情報や書影・蔵書印影等の集積場所としてのデータベースに留まらず、それらを“育てていく”取り組みの一端を紹介する。併せて、“書脈”というキーワードから「蔵書印データベース」の今後の可能性を考える一助としたい。

1. 他に類を見ない機能・特性

本データベースの機能的な特徴として、①多様な検索項目、②検索結果からの再検索機能、の2点をあげることができる。

①は、印文が判読できない場合等に、複数の検索条件を

組み合わせることで、目的の印影にたどりつくアシストの役割を果たす^(注1)。例えば、検索フィールドでは、蔵書印のサイズと色は、「縦3cm未満」「縦3cm～5cm」「縦5cm以上」や「朱系」「緑系・青系」「黒系」「それ以外」といった選択項目を設けることで、視認上の個人差やある程度の誤差を排除した“ゆるやかな検索”に対応する。

次に、現在採録している項目を、その要素ごとに分類し示しておく。

[典籍情報]

典籍ID、書名、(書名よみ^{*1})、(著者ID)、著者、刊記、所蔵先、請求記号

[蔵書印情報]

蔵書印ID、蔵書印文、陰陽、サイズ(縦×横)、色、形状、(印文文字数^{*2})、(印文出現位置^{*3})

[蔵書印主情報]

人物ID、蔵書印主、蔵書印主よみ、人物情報

[その他]

(レコードID)、典拠資料、備考

以上、1レコードにつき23の項目と印影(蔵書印のクロージアアップおよび見開き丁の、最大2画像)によって蔵書印データベースは構成されている。なお、丸括弧内は現行システムでは検索結果に表示していない項目、うち、右肩に*を付した3項目については、2013年度のシステム改修において検索項目に(*は表示項目にも)新たに設定する予定である。

印文文字数の指定は、例えば、名古屋の貸本屋・大惣所用の「大」印([図2]左)等、少ない文字数の印文を検索するケースでヒット数を初期値から絞り込み、効率よく情報を抽出することを可能にし、印文出現位置の指定は、[図2]中)のような事例で効果的な検索を実現する。



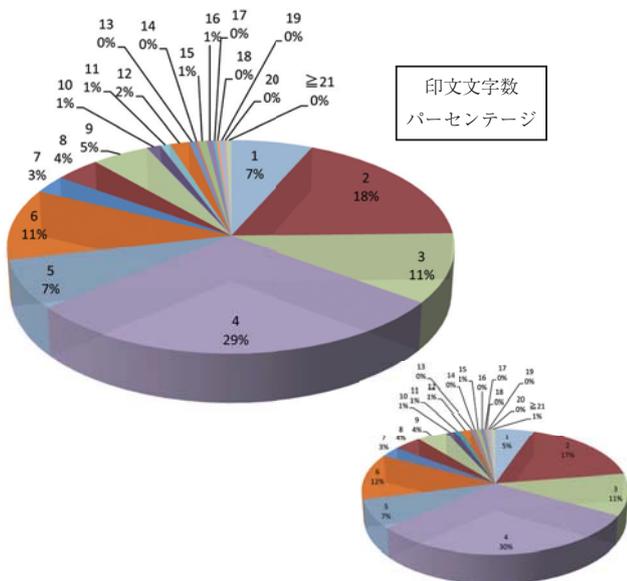
[図2] 左)『周防の内侍』巻末(東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵)
中)『松魚風月』序丁表(東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵)
右)『草庵集玉箒』後ろ見返し裏(国文学研究資料館所蔵)

判読出来る文字——上記の例で示せば、「崎」「2(文字目)」と出現位置を指定することで、求める印影や蔵書印文に容易にアクセスすることが可能となる。

[図2]の「大」「崎」それぞれを通常検索と条件設定ありとでヒット件数を比較すれば、前者は1,292件→40件(文

字数「1」指定)、後者は113件→81件(「崎」[2(文字目)]→41件(文字数「4」指定)となる。

この機能をより有用に使うために、単一文字数指定と併せて文字数範囲指定による検索も視野に入れている。[図3]上)は、蔵書印レコード数:17,618件(2013年3月現在)を対象に、印文文字数別の比率を円グラフに示したものである。4文字の印文が29%(5,084件)と最も多く、2文字18%、3文字・6文字が各11%と続く。13文字から21文字以上までは、ほぼ100件を下回っており0~1%となっている。



[図3] 印文文字数別レコード分布
 上) 公開用蔵書印レコード:17,618件
 右) 作業用を含むレコード:23,879件

蔵書印レコードの母数増加によっても、分布に大きな変動がないことは、[図3]右)の検証結果からも推察できる。これらの統計を元に、文字数を範囲指定する場合の組み合わせを検討し、検索機能を追加していきたい。

2. 蓄積することの重要性

前章で述べた「他に類を見ない機能・特性」と分かち難い関係にあるが、「蔵書印データベース」はその内容面・採録データの種類においても、数多存在する蔵書印譜とは一線を画する。重複する蔵書印の採録は勿論、墨消しや擦り消し等により印文の痕跡を留めない画像までも採取対象とする。[図2]右)に示した仕入れ印や貸本屋印を含む書肆印^(注2)、蔵書票・書肆票の類も例外ではない。そうして集積されたデータ群から新たな知見や効用が期待され、情報の修正や追認も可能となろう^(注3)。

以下、事例を1つ紹介してみたい。

『新編蔵書印譜』は、清原経賢の所用印として「清原」(朱文壺印)・「経賢」(朱文方印)を載せる。「蔵書印データベース」には、「清原」(朱文壺印)が1顆採録あり(東京大学東洋文化研究所所蔵『孟子十四卷 慶長中用古活字印本景刊』)、しかも「弘賢」(朱文方印)との併捺。では、本資料の「清原」印は、弘賢の兄・経賢による押捺であろうか。ここで、[図4]に掲出した押捺例に拠れば、「清原」印は、「清原朝臣相起」すなわち舟橋家32代当主清原弘賢の使用例もあることがわかる。

従って、「清原」(朱文壺印)は、「船橋」(白文長方印、『新編蔵書印譜』所載)や「船橋蔵書」(朱文長方印、同上)と同様に、清原家の印と認められよう。

もとより、印影を蓄積することの目的の1つは、散逸したコレクションをバーチャルに再編し、印主の学問的背景

[図4] 京都大学附属図書館・清家文庫所蔵『筮案』(1-62/セ/1貴)

や知的興味等を浮かび上がらせること、そして、典籍の流通・来歴・出所・伝来を明らかにするツールとしての活用にある。共時的・通時的に書物をつなぐ役割として蔵書印を眺めるとき、書物を介した情報網、書物を結節点とする知的連鎖が浮かび上がってこよう。それを仮に「書脈」と呼ぶならば、書脈を可視化する蔵書印の可能性は無限に広がっている。

今後さらに多様な機能を実装し、データ数を増強していくことで、「蔵書印データベース」は多元的な知識の提供と学術研究上の新たな提案を可能にし、複合的な情報ナビゲーションの役割を担うものと考えている。

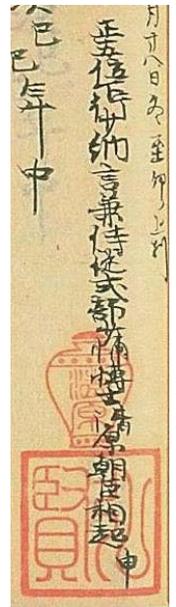
[注]

(1) 組み合わせや絞り込み検索の事例は、拙稿「忍頂寺文庫・小野文庫所蔵資料押捺蔵書印一覧 附・国文学研究資料館「蔵書印データベース」について」(『近世風俗文化の形成—忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺』2012年3月、国文学研究資料館)参照。当館webサイト内「活動・成果の紹介」http://www.nijl.ac.jp/pages/research/activity/ninjoji_ono/ninjoji_ono.htmlにて、PDF版閲覧可。

(2) 仕入印の所有者特定に関しては、その多くを鈴木俊幸『書籍流通史料論序説』(2012年6月、勉誠出版)に拠り作業中。

(3) 例えば、「子孫永保/雲煙家蔵書記」印の所有者をめぐる、安西雲煙と鹿島清兵衛の二者間での錯綜を糺した大野順子「蔵書印「子孫永保/雲煙家蔵書記」について—その来歴と蔵書印主」は示唆に富む。「蔵書印データベース」の「リンク」ページhttp://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/link.htmlにてPDF資料閲覧可。

[附記] 東京大学総合図書館ならびに京都大学附属図書館には、貴重資料の画像掲載許可を賜った。記して深謝申し上げる。



『中国古籍総目』の編纂について

呉 格（中国・復旦大学図書館）

【解説】

2013年2月5日（火）、早稲田大学訪問中の中国・復旦大学図書館古籍部の呉格先生をお招きして、現在刊行中の中国古典籍の総目録である『中国古籍総目』の編纂事業について紹介して頂いた。本館2階第1会議室で開かれた講演会は呉格先生の丁寧な御紹介と参加者の熱心な質問によって4時間も続き、煩雑な業務に追われる年度末において、たいへん充実して収穫の多い日となった。

『中国古籍総目』は日本の『国書総目録』に相当するもので、その完成は世界各国の漢籍研究者・利用者にとって極めて喜ばしいことである。また、本目録の編纂状況は「日本古典籍総合目録データベース」の構築と管理にかかわっている本館の関係者にとってもたいへん参考になるものであるため、当日の講演内容の要約を翻訳して掲載することにした。この場を借りて講演と講演内容の掲載を御快諾して下さいました呉格先生に感謝を申し上る次第である。（国文学研究資料館研究部・陳捷）

一、『中国古籍総目』の編纂趣旨

(1) 『中国古籍総目』（略称『総目』）は現存する中国の漢文古籍の総合目録であり、中国（大陸及び香港・マカオ・台湾地区）と外国（日本、アメリカなど）に現存する漢文で記された主な中国古典籍とその版種、主要な所蔵者を全面的に反映することを目的とするものである。

(2) 『総目』の著録は古典籍の品種によって項目を立て、それと同時に各書の主要な版種を著録するものである。

(3) 『総目』は聯合目録の機能も兼ねており、各版種の後に所蔵図書館の略称を付記する。

二、『総目』の調査範囲

(1) 大陸地区の古典籍の品種について、

まず中国において古典籍の所蔵数が最も多いとされている中国国家図書館、北京大学図書館、上海図書館、南京図書館の四つの図書館の蔵書に基づき基礎書目を作成し、また、中国科学院文献情報センター、復旦大学図書館、天津図書館、遼寧省図書館、山東省図書館、浙江図書館、湖北省図書館および他の図書館の蔵書記録でこれを増補する。

(2) 中国国内においてすでに出版された（貴重書、叢書、方志、家譜、硃卷などの）各図書館の古典籍所蔵書目および聯合目録を利用する。

(3) 香港・マカオ・台湾地区および韓国、日本、北アメリカ、欧州各国の図書館より出版された一部の古典籍蔵書目録をも利用し、中国大陸地区に所蔵されている古典籍以外の品種、版種および収蔵情報を補充した。

三、『総目』の著録対象

(1) 民国元年（1912）以前に書写あるいは整版・活字、影印などで印刷された歴代の古典籍。

(2) 民国元年以前に成立し、それよりやや後に書写・刊行され、(1)と類似した性格を有する古典籍。

(3) 書写あるいは整版・活字印刷、影印などの複製手段によって書物としたもの（書籍・新聞・雑誌に収録されている文章は著録しない）。

(4) 漢文と少数民族文字とが混在する（例えば満漢合璧の）古典籍（少数民族文字のみの古典籍は著録しない）。

(5) 漢文をもって外国語を注釈する図書（例えば『華夷訳語』など）。

(6) 仏蔵、道蔵の子目はすべて著録し、単行していない子目については別に項目を立てない。

(7) 甲骨、銘文、石碑、竹簡、木牘および帛書などの文物性を有する文献の実物、敦煌遺書、金石拓本、地図、書画、

魚鱗冊、宝鈔、契約、誥命、文告など（すでに表装され、冊子あるいは巻物となったものを含む）については、すでに編纂され、書写あるいは刊刻、影印などを通して書物となったもの以外は著録しない。

四、『総目』の立項ルール

1、別々に立項する古典籍の品種

(1) 原本の内容が異なるもの。

(2) 原本の内容は同じだが、後世において注釈・批評・抜粋などの編纂が加えられたもの。

(3) 内容の一部は同じだが、全体として異なる部分があるもの。

(4) 著者は同じだが、異なる時期に編纂されたもの。

2、別々に立項しない古典籍の品種

(1) 原本の内容を保っている重（或いは影、覆、翻）刊本。

(2) 原本の形式を保っている清末の影印本および原本がすでに無くなってしまった民国の影印本。

(3) 版本は同じだが、異なる書き入れ、題跋が加えられたもの。

五、『総目』の分類

(1) 『中国古籍善本書目』の分類表を参照して、経・史・子・集・叢の五部に分類する。

(2) 『中国古籍善本書目』の分類表を参照して、部の下の各類、属の名称および内容を調整する。

(3) 史部に譜牒類・方志類を設け、子部に新学類を増設し、関連する文献を著録する。

(4) 各類、属の名称および内容の調整はすべて編集委員会の討論を経て、さらに各編集分担館の確認の上で行う。

六、『総目』の著録内容

(1) 書名項（書名、副書名、附録および巻数など）。

- (2) 著者項（主要な著者および他の著者の王朝、姓名および著述方法）。
- (3) 版本項（出版年、出版者、出版地、版種の類型、叢書名、書入れおよび題跋など）。
- (4) 附注項（書名、著者、版本の項において著録されたものの補充、説明）。
- (5) 図書館の業務注記（所蔵図書館の略称、『総目』の最後に略称表を付載する）。
- (6) 分類の標記（『中国古籍総目分類表』によって各部、類、属の最初に表記する）。

七、『総目』の配列のルール

- (1) 立項する品種は『中国古籍善本書目』を参照して分類によって配列する。
- (2) 同じ類型の著作、同じ著者の同類の著作はすべて成立年代の順序で配列する。
- (3) 同一の著作より派生した著作は、白文・本文中の注釈・評論研究などの順序で配列する。
- (4) 同じ品種の異なる版種については時代順によって配列し、時代が同じものについては稿本・刊本・写本の順序で配列する。

八、『総目』の編纂担当

- (1) 経部：北京大学図書館
- (2) 史部：上海図書館
- (3) 子部：南京図書館
- (4) 集部：国家図書館
- (5) 叢書部：湖北図書館
- (6) 新学類：天津図書館
- (7) 総校訂：復旦大学図書館

九、『総目』の編纂進度

- (1) 『総目』は国务院の下に設けた古籍整理出版規劃組（全国古籍整理出版規劃指導班）を中心として編纂作業に着手する。
- (2) 『総目』の編纂は1994年より始動し

たが、一度の中断を経て2004年に再開され、2013年にすべてが刊行される予定であり、のべ二十年間を要している。

- (3) 2004年以降においては、中国国家図書館、上海図書館、南京図書館、天津図書館、湖北図書館、北京大学図書館、復旦大学図書館などがそれぞれ編纂作業を担当した。
- (4) 2007年以降、各担当館より『総目』の初稿を提出し、専門家の審査、統一および訂正を経て、出版作業に入った。
- (5) 復旦大学図書館は『総目』の収録範囲・立項ルール・著録ルールなどの策定を担当し、また、『総目』原稿の統一修正および『総目書名索引』・『総目著者索引』の作成を担当した。

十、『総目』の出版進度

『総目』は経・史・子・集・叢部の五部および索引より構成され、北京の中華書局および上海古籍出版社の二つの古典関係の専門出版社によって共同出版がなされる。

- (1) 経部（2冊）中華書局、2012
- (2) 史部（8冊）上海古籍出版社、2010
- (3) 子部（7冊）上海古籍出版社、2011
- (4) 集部（8冊）中華書局、2012
- (5) 叢部（2冊）中華書局、2010
- (6) 索引（3冊）上海古籍出版社、2013

十一、『総目』編纂の意義

- (1) 20万点近くの現存する中国古典籍の品種を収録した。
- (2) 中国大陸の他、香港・マカオ・台湾地区および日本・韓国・北アメリカ・西欧などの図書館に所蔵されている一部の中国古典籍の稀覯品種も収録されている。
- (3) 現存する中国古典籍の主な版種を収録した。

(4) 伝統的な四部分類法を継承し、必要な部分を改善した。

(5) 中国内外の学者・専門家に今日までにおける最大規模の古典籍目録ツールを提供した。

(6) 今後、より広い範囲における中国古典籍の悉皆調査およびより網羅的な古典籍目録の編纂の基礎を築いた。

平成 24 年度 日本古典籍講習会

平成 25 年 1 月 23 日（水）～ 25 日（金）に国立国会図書館と国文学研究資料館が共催して、平成 24 年度日本古典籍講習会を開催しました。

本講習会は、日本古典籍の整理・目録化を促進し、広く活用されるよう環境の整備を図るため、書誌学の専門知識や整理方法の技術修得を目的として開催しております。

平成 24 年度は開講 10 周年目にあたり、講義内容の見直しが図られました。また、募集人数の枠を昨年度より 2 名多い 32 名とし、応募者の要望に答えました。

講義では、国文学研究資料館の教員及び国立国会図書館の職員が講師となり、日本古典籍の基礎知識、和古書目録の作成、データ・ベース化の方法、近世の出版と流通、くずし字の読み方、蔵書印の見方・読み方など、写本・刊本の基礎から、国文学研究資料館及び国立国会図書館の和古書目録規則の説明、古典籍資料の保存・管理法、貴重書紹介、国立国会図書館新館書庫（地下 6 階）の見学など、目録・デジタル化・資料保存・実習・施設見学まで様々な講習を行いました。

受講者からは、「基本的なことを幅広く知ることができ、今後自らの職域にあわせて何を学んでいけばよいのか、その方向性を見出すことができました。」、また「全ての講義・実習で「実物」にたくさん接することができたことがとても良かった。」等の意見があり、短期間とはいえ充実した講習会となりました。



「書誌データ カatalog化と研究の間」 講義風景



「くずし字の見方・読み方ー書風の変遷と調べ方ー」 講義風景



質疑等に応じる講師陣



実際に和古書を手にする受講者

人間文化研究機構連携展示「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」

平成 25 年 1 月 30 日（水）から 3 月 15 日（金）まで、当館において人間文化研究機構連携展示「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」が開催されました。この展示は、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で被災した有形・無形の文化遺産に対する人間文化研究機構所属機関の復興支援事業を紹介するとともに、この震災の記憶をどのように後世へと引き継いでいくかを考える契機とするために企画されたものです。

展示は、〔第一部〕文化遺産の復興とその支援、〔第 2 部〕記憶の継承、〔第 3 部〕文書で継承された記憶、という 3 部構成で、第 1 部では、岩手県内の代表的な民俗芸能である釜石虎舞・鵜島神楽・笹崎鹿踊の被災状況と全国的規模での復興支援の取り組みが、ビデオ映像も交えて紹介されました。また、国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館・国文学研究資料館による被災文化遺産に対する救助・復旧活動の様子もパネルで展示され、さらには、鵜住居観音堂（釜石市）に押し寄せた津波で流失・損壊し、救出・修復された秘仏の十一面観音像が、別当慈眼院のご厚意により千手観音座像・不動三尊立像とともに特別公開されました。



展示会場の様子

第 2 部では、地震や津波の記憶を後世に伝える各地の寺社や石碑を紹介した画像データベースや、安政南海地震の際の逸話「稲むらの火」を題材にした紙芝居、この逸話を各国語に翻訳した防災教育用の教材などが紹介され、大災害の記憶を次世代へ継承していく多様な取り組みの存在が示されました。

第 3 部では、当館所蔵の歴史資料の中から、安政東海地震の古文書、明治三陸津波への支援の記録、関東大震災の写真などが展示され、歴史的災害の中であって、被害の記録のみならず、その後の支援や復興を跡づける「遺された記録類」の重要性を伝えていました。

なお、会期中の 3 月 8 日（金）には、「東日本大震災から 2 年、津波被害と文化遺産」と題する災害連携研究報告会が当館 2 階の大会議室で開催され、次のような報告・討論が行われました。

〔趣旨説明〕被災紙資料の保存と活用に関するソリューション研究紹介：青木睦（当館准教授）／〔基調報告〕被災文化財等救援委員会活動の 2 年間：神庭信幸（東京国立博物館保存修復課長）／〔報告 1〕津波で被災した紙質文化財の生物劣化に関わる微生物群の調査：佐藤嘉則（東京文化財研究所生物科学研究室研究員）／〔報告 2〕「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」被災地を展示するということ—：日高真吾（国立民族学博物館准教授）／〔報告 3〕津波被災自治体文書への復旧対応と現状：林貴史（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会臨時委員会委員）／〔ディスカッション〕コーディネーター：青木睦

東日本大震災から 2 年が経過し、人びとの被災地への関心が次第に薄れつつある今日、この展示と研究報告会は、改めて災害と向かい合う「気構え」の大切さを教えてくれたような気がします。（太田尚宏）

文化庁長官より感謝状が授与されました



国文学研究資料館による東日本大震災被災文化財等の救援・修復への支援活動に対して、平成 25 年 3 月 25 日、文化庁長官より感謝状が授与されました。

国文学研究資料館常設展示「和書のさまざま」

本展示では、和書について、まず形態的、次に内容的な構成を説明した上で、各時代の写本・版本や特色のある本を紹介し、併せて和書の性質を判断する場合の問題をいくつか取り上げております。全体を通して和書の基本知識を学んで頂くとともに、和書について考えるきっかけとなって頂ければ幸いです。

また、常設展示の一部のスペースを使って、特設コーナーを設け、当館の新収資料等も展示しておりますので、併せてご覧いただければと存じます。

開室時間：10時～16時30分 ※入室は16時まで

会場：国文学研究資料館1階展示室

休室日：土曜、日曜、国民の祝日、振替休日、年末年始

※なお、特別展示、企画展示を開催する場合は休室日が異なる場合があります。

料金：入場無料

展示替え：文化財保護のため展示替えを行います。



巻子本



折本

百人一首たまたばこ

当館の社会貢献事業の一つとして、昨秋新たにラジオ放送が加わりました。地元立川のラジオ局「FMたちかわ」から放送をするという企画で、具体的には、2012年10月から2013年3月までの半年間、週一度、武井協三当館名誉教授が「歌舞伎を話そう」という番組を担当されました。その好評により、引き続きの依頼を受け、今年度企画したのが標記のようなタイトル名の番組です。

周知の通り、鎌倉時代の13世紀前半に藤原定家が撰んだ『百人一首』は、のちの室町時代から江戸時代にかけて、文学はもとより演劇・絵画、果ては遊びの世界にいたるまで、広範にして多大な影響を与え続け、それは現代にまで及んでいます。そもそも百首本体が『百人秀歌』との関わりの問題を主として、成立にお謎を残す上に、こうした多彩な受容は日本文化史上に類例乏しく、『百人一首』とは、いかなる切り口からのアプローチにも魅力的に反応する作品と言ってよいでしょう。古代文学から近代文学まで、スタッフが揃った当館が担当するには恰好の対象に違いなく、各専門の立場を活かした分担の企画としました。

担当は以下の通りです（敬称略）。4月：寺島恒世、5月：神作研一、6月：海野圭介、7月：中村康夫、8月：入口敦志、9月：恋田知子、10月：齋藤真麻理、11月：小林健二、12月：山下則子、2014年1月：小山順子、2月：田中大士、3月：谷川恵一・青田寿美・野網摩利子（予定）。

古代文学から近代文学までの各専門の立場から、それぞれの興味と関心に応じて自在に話してもらうこととし、担当者に内容・表現ともに一切制限は求めておりません。条件はただ一つ、市民の皆さんに耳からのみで分かっていた話とすること。

思いがけない話が沢山飛び出す箱になり、広く社会に文学への親しみが深まりゆけば幸いです。

（統括責任：寺島恒世）



注入百人一首折帖 山部赤人・柿本人麿



注入百人一首折帖 持統天皇・天智天皇

平成 25 年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会通算第 59 回）の開催

1. 趣 旨

国文学研究資料館では、アーカイブズ（記録史料）の収集・整理・保存・利用等に関する最新の専門的知識、及び技能の普及を目的として、アーカイブズ・カレッジを開催しています。

2. 期 間

A. 長期コース（東京会場）国文学研究資料館

前期＝平成 25 年 7 月 22 日（月）～平成 25 年 8 月 16 日（金）20 日間

後期＝平成 25 年 8 月 26 日（月）～平成 25 年 9 月 20 日（金）19 日間

B. 短期コース（岩手会場）遠野市立図書館

平成 25 年 11 月 11 日（月）～平成 25 年 11 月 22 日（金）11 日間

3. 申込資格

次のいずれかに該当する方です。

（1）文書館などの歴史資料保存利用機関をはじめとして、官公署・大学・企業等の文書担当部局及び歴史編纂部局、又はアーカイブズを取り扱う必要のあるその他の組織に勤務し、アーカイブズの収集・整理・保存・利用等の業務に従事している者。

（2）大学院在学中又は大学卒業以上の学歴を有する人で、アーカイブズ学に強い関心を持つ者。

4. 受講料

無料（ただし、テキスト代は受講者負担〔500 円程度〕）。

5. その他

申込書、及び詳しい情報等については当館 Web ページ（<http://www.nijl.ac.jp/>）をご覧くださいか、管理部総務課企画広報係（TEL（050）5533-2910）までご連絡下さい。



平成 24 年度アーカイブズ・カレッジ長期コース

新収資料紹介 生巧館木口木版資料

幕末から明治にかけ、日本の出版文化は西洋からもたらされたさまざまな印刷技術により大きな変貌をとげる。活版印刷の急速な普及がそのもっとも顕著なファクターとなるが、石版および木口木版もまた一枚刷りを始め本の表紙や挿絵などにおいて重要な役割を担った。在来の木版印刷が桜材の板目に版をおこすのに対し、輪切りにした黄楊材を用いるのが木口木版で、18 世紀後半からイギリスやフランスなどにおいて発達し、精密な図版で書物を飾った。

日本における木口木版の本格的な試みは、フランスで木口木版の技術を習得して帰朝した合田清が明治 21 年に東京の芝に建てた生巧館に始まり、以降、多様な出版物にそこで製作された図版が供給されていった。

今回、当館の所蔵になった生巧館木口木版資料は、薄手の和紙に刷られた多量の図版よりなり、それらの大半は雑誌や書籍の表紙・挿画・カット・広告などの試し刷り（清刷）であり、そこには『国民之友』・『太陽』・『日清戦争実記』・『鉄道唱歌』など、よく知られた出版物の表紙も含まれている。これらの一部には、校正の指示や価格が書き込まれたものがあり、木口木版製作の工程や工賃をうかがい知る手がかりを与えてくれる。（谷川恵一）

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○「卓越した大学院拠点形成支援補助金」

日本文学研究専攻は、平成 24 年度の文科省「卓越した大学院拠点形成支援補助金」に申請し、12 月に交付内定されました。総合研究大学院大学文化科学研究科では、当専攻のみの選定でした。主に学生の授業料援助のためのリサーチアシスタント事業や、『漢語大詞典』等の CD-ROM、『日本随筆大成』NetLibrary 全巻購入等の研究環境の整備、国内・国外への調査旅費（リサーチトレーニング事業）等に使用しました。なお、学生の調査旅行であるリサーチトレーニング事業の成果は、学術交流フォーラム等で発表することになっています。

○海外学生派遣事業

在学生の江崎公子さんが「2012 年度海外学生派遣事業」に申請し、採択されました。研究題目は「美的芸術としての art の成立—明治期辞書における翻訳語の検討を通して—」、派遣先はオランダ・ライデン大学図書館及びシーボルト資料館、派遣期間は 2013 年 2 月 26 日～2013 年 3 月 29 日までです。

○第 2 回特別講義

平成 25 年 1 月 9 日(水)に平成 24 年度第 2 回特別講義が開催されました。題目は「中近世移行期の公家家職の展開」(西村慎太郎准教授)、「絵本名義考」(鈴木淳教授)でした。熱のこもった講義に、多くの質疑応答がなされました。



西村准教授



鈴木教授

○若手教員海外派遣事業

野網摩利子国文学研究資料館助教が、特別経費「国際的視野を持った研究者養成のための多面的国際交流事業の展開」の中の「若手教員海外派遣事業」に採択されました。研究題目は「夏目漱石によるヨーロッパ思想の受容に関する研究」で、派遣先はイギリス・ロンドン大学アジア・アフリカ校、派遣期間は 2013 年 4 月 25 日～2013 年 5 月 27 日までです。

○博士(論文)の学位授与

平成 24 年度博士(論文)の学位が以下のように授与されました。

「西鶴小説新論—東アジアへの視界—」 染谷智幸茨城キリスト教大学教授

5月							6月							7月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4							1		1	2	3	4	5	6
5	6	7	8	9	10	11	2	3	4	5	6	7	8	7	8	9	10	11	12	13
12	13	14	15	16	17	18	9	10	11	12	13	14	15	14	15	16	17	18	19	20
19	20	21	22	23	24	25	16	17	18	19	20	21	22	21	22	23	24	25	26	27
26	27	28	29	30	31		23	24	25	26	27	28	29	28	29	30	31			
							30													

- 開館 9:30～18:00 ●請求受付 9:30～12:00 13:00～17:00 ●複写受付 9:30～16:00
 ただし、土曜開館日は、
 ●開館 9:30～17:00 ●請求受付 9:30～12:00 13:00～16:00 ●複写受付 9:30～15:00

表紙絵資料紹介

げんじものがたり 〔源氏物語〕（当館蔵）

そん 存45巻。むらさきしきぶ 〔紫式部〕作。てんぶん 天文16年写。おおほん 大本45帖。
 縦28,2^{センチ}×横19,0^{センチ}。はなだいろ 縹色表紙改装。かいぞう 左肩に金銀下絵入りの
 げんだいせん 原題簽を貼り、「はき木」「末つむ花」などと巻名を記す。りょうし 料紙は斐
 ちよま 楮混ぜ漉き。れつちようそう 列帖装。ほしや 一部の帖は補写。きりつぼ 〔①桐壺〕〔③空蟬〕〔⑤
 わかむらさき 若紫〕〔⑩賢木〕〔⑬松風〕〔⑯柏木〕〔⑲夕霧〕〔⑳匂宮〕〔㉑
 ゆめ 夢の浮橋〕の九帖を欠く。うきはし 補写を除く帖に「天文十六年（丁／未）
 正月二十五日／蒲池近江守鑑盛（花押）／右筆以泉（花押）」と
 おくがき の奥書を有する。（神作研一）

